

奏であう人

vol.68



山口 英夫さん(米沢市)

昭和37年生まれ、米沢市出身。織機をプリンターに見立て、写真や文様のデータをパソコンから直接織物にできる写真織の技術を開発。作品は米国のメトロポリタン美術館にも所蔵されるなど、芸術面で高い評価を得るとともに、その技術を応用し、「米織小紋」など独自のファッションブランドを展開するなど、現代のライフスタイルにも合う米沢織の製品開発を手がけている。

先人が伝えた技を次代へとつなぐ



米沢織の織元として生まれ、写真織という新たな技法を打ち出した山口さんと、剪定鋏という山形打刃物の世界にIターンで飛び込んだ飯田さんに、伝統の技を次代に残すために必要なことについてお聞きしました。



飯田 千鶴さん(山形市)

昭和44年生まれ、東京都出身。都内の広告代理店の仕事に従事する一方で、一生ものの職人の技に憧れを抱きはじめる。かつてテレビで見た打刃物の世界、とりわけ鋏に魅了され、剪定鋏の切れ味一番は山形県と聞くと、運命に導かれるように株式会社飛庄の門を叩く。以来、切れ味を極めて樹木の命をつなぐ剪定鋏を作ることを目標に、第二の人生として鍛冶職人の道を歩む。



200以上もあるという工程の終盤、切れ味に直結する“刃付け”。飛庄印の特長のひとつ“ハマグリ刃”。切り刃の形状をハマグリのような形に仕上げることで強靱(きょうじん)さと鋭さが生まれる。剪定時の切り抜けが抜群に良くなる構造で、摩擦が少なく切断面へのダメージを軽減する効果がある。

時代背景に合わせ 変化し続ける工芸の姿

二十代も後半に差し掛かった頃、当時の最先端モデルのパソコンを購入し、織機を使って、写真を正確に織物で再現する写真織の技法を開発した山口さん。それは芸術として認められ、ニューヨークでの個展のほか、国内外での美術館展示など多くの功績を残すことになりました。

「私の予想以上に多くの人、多くの国で受け入れられました。ひとつの柄物生地としての提案が、芸術面で認められたことは、大きな驚きでした。」と山口さんは言います。

世界を魅了した新たな技法の開発は、同時に米沢織の可能性を世界に知らしめました。

一方、東京の広告代理店で伝統産業の魅力を発信する仕事に就いていた飯田さんは、昔から興味があったものづくりに従事したいと、四十歳を過ぎて自身の軸となる仕事を探しはじめます。情報を収集していたところ、“最高の切れ味”とも称され、イギリスの有名ガーデンナーも愛用する飛

日常に寄り添う製品として

庄の剪定鋏に出会い、山形への転職・Iターンを決意。平成27年から同社の鍛冶職人として働きはじめました。「果樹の成長に欠かせない、余分な枝などを切り落とす剪定作業では、剪定鋏の切れ味が重要に。鋭い切れ味によつて切断面が綺麗なほど果樹へのダメージを減らすことができます」。南北朝時代の刀鍛冶がルーツとされる山形打刃物ですが、包丁や鎌のほか、剪定鋏という形に転じたのは、山形で盛んな果樹栽培が背景にあるといわれているそうです。

各地で伝統産業の後継者不足が課題となっている現代において、その技を次代へつなぐために大切なことは何でしょうか。

「自分たちで新たなニーズを作っていくことが、とても重要だと感じています。」と山口さん。さらに言葉を続けます。

「米沢織を日常生活の中で使ってもらえるよう、写真織の技術を生かし、オリジナルブランドの商品を自ら企

画、製造、販売をしています。

”米織インザライフ“をコンセプトに米沢織を普段使いできるようなと開発した小紋柄のストールやバッグなどが好評をいただいています。山口さんの言葉に飯田さんも応えます。

「飛庄の剪定鋏は、果樹産業が盛んな山形で、農家さんが使いやすいようにと、切れ味、使い心地を追求し、改良を重ねてきました。使う人のことを考えたものづくりが飛庄の剪定鋏を選んでもらうことにもつながっていると思います。」

「確かに握りやすい。機能を追求した美しさを感じますね。」と剪定鋏を手取る山口さん。飯田さんが続けま

「農家さんから日々の剪定作業で使いやすいな、楽だなと思ってもらえる最高の鋏をこれからも作り続けていきたいです。それがおいしい果物づくりのお手伝いになれば幸せですね。」山口さんがこれに応えます。

「今、伝統産業に関わる私たちが、次の世代に伝統産業の面白さ、可能性を伝えていくことが大事ですね。」

